

京都大学	博士（文学）	氏名	稲葉 穰
論文題目	フロンティアとトランス・フロンティア —前近代アフガニスタン史の研究—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は現在のアフガニスタン・イスラーム共和国を中核とし、その隣接地域をも含む空間を、異なる文化世界、歴史世界のフロンティア、接点（コンタクト・ゾーン）と見なし、とくに前近代におけるその歴史を考究しようとするものである。現在のアフガニスタン・イスラーム共和国は、東と南をインダス川流域に伸びるパキスタン、西をイラン高原の大半を占めるイラン・イスラーム共和国、北西および北をトルクメニスタン、ウズベキスタン、タジキスタン各共和国に画された内陸国家（国境線としてはインド、中国とも接している）である。国土の大部分は山岳地帯あるいは高原地帯で、多くの地域は海拔600mから3,000mの範囲にある。海拔300m以下の土地はアム川左岸、アンドフーイからアクチャにいたる地域のみである。地質学的に見れば今から4500万年前、プレート移動によってインド・プレートが北上し、ユーラシア・プレートに衝突した結果、インド亜大陸の北側に弧を描くように高い山々が形成されたが、アフガニスタンはこの弧状の山岳の西の端、それがイラン高原と接していくつもの支脈にわかれる場所にある。このような山岳の存在は、とりわけ前近代において人や物の移動、輸送を様々な形で制約したのであり、それゆえイラン高原を中心とする西アジアと、インド亜大陸である南アジア、およびアム川以北・以東の中央アジアとは、それぞれ異なる文化世界、歴史世界として発展をとげてきたと考えられてきた。しかしながら、あらためて言うまでもなく、これらの世界は、隔てられると同時に様々な形で交流してきたのである。そのような交流のチャンネルこそ、前近代における道の存在であるのだが、古来より西アジアと南アジア、中央アジアと南アジア、さらには中央アジアと西アジアの間の接触と連絡は、この歴史のアフガニスタンの山岳地帯を環状に巡る「道」を通じて行われてきた。ちょうどロータリー式交差点のように、ユーラシア大陸に東西南北に張り巡らされた主要交易ルートはこの環状の道に一度合流し、再び各方面へと伸びていった。本論文は、この境界領域の歴史を種々の資料よりたどり、前近代における境界領域＝フロンティアとそこを巡る交通路のあり方、およびそれがこの地域の歴史に与えた影響を探るとともに、いわゆる歴史的フロ</p>			

ンティア研究のための比較対象として同地を位置づけ、分析しようと試みるものである。

扱う対象は空間的には現在のアフガニスタン国家の領域を中心としつつも、さらにその周辺地域におよぶ。この、北はバクトリア、西はホラーサーン、東は北西インドにおよぶ領域をいま仮に「歴史のアフガニスタン」と呼ぶ。これは、文化世界、歴史世界の接点、境界領域のこの地域を通時的に指し示す適切な歴史的名称がないためである。一方本論で扱われる時代範囲は、西暦で言えば六世紀から十二世紀、歴史的事象に絡めていうなら、エフタル期からモンゴル時代前夜までということになる（一部モンゴル時代以降にも説き及ぶが）。言うまでもなくこの間、歴史のアフガニスタンの全域がイスラーム教徒による征服を受けており、これを軸とするならばイスラーム前夜から初期イスラーム時代が主な対象ということになる。

以下、本論の構成と内容を概述しておく。

まず序章「フロンティアとしてのアフガニスタン」では、本論の題名にもあるフロンティアとトランス・フロンティアについて、本論がどのような含意をもってこの言葉を用いているのか、特にヒンドークシュ山脈という山岳地帯を対象としてどのような様相を論じようとしているのかを述べる。そこで特に注目するのは、フロンティアの持つ分離的および包摂的な二つの特質、あるいはNicola Di Cosmoの指摘する、歴史のフロンティアの二つの様態、すなわち歴史的構築物としてのフロンティア（政治や軍事活動の成果として成立する境界）と、それとは異なる心理的なフロンティア（「文明」の間のフロンティア）の存在であり、これらを手がかりとしてこの問題を考えることを述べる。

第一部「フロンティアの政治集団」では、ポスト・クシャーン期からイスラーム時代初期に到る時期にヒンドークシュ山脈周辺に興起した諸政治集団、国家について、様々な資料を用いてその政治史を明らかにすることを試みる。そもそも1990年代頃まではこの地域の具体的な歴史はほとんど知られておらず、いわゆる通史的な記述も困難であった。第一章「ポスト・グプタ期の政治集団」では、近年貨幣学の研究の進展に基づいて区別されるようになったこれらの「政治集団」がどのようにして史上に登場するのか、互いにどのような交渉を持ったのかについて、既知の文献資料や考古資料を援用しつつ検討する。第二章「カーブルシャーの時代」においては七世紀か

ら十一世紀にいたるまでアフガニスタン東部からガンダーラ方面を支配した王権について、その起源、活動、派生勢力、およびイスラーム勢力との関係を論じる。中世以降の特にヨーロッパ史においてしばしば「フロンティアの軍事化」という現象が指摘される。政治的軍事的境界線としてのフロンティアの両側が軍事化し、しばしば独自の動きをする軍事集団、軍閥を形成するという事象であるが、十世紀以前のこの地域、特に東部アフガニスタンが、それぞれの文化世界、歴史世界の縁辺として、様々な種類の軍事集団が跳梁跋扈する場所であり、結果として時に破壊的な力を持つ軍事集団が生み出されることがある、ということの実例が示される。

第二部は「フロンティアの帝国」と題し、ガズナ朝の建国からセルジューク朝の支配、ゴール朝の興亡までの時代の歴史を解明する。第三章「ガズナ朝の出現とフロンティア」では、八世紀から十世紀にいたる間の、ヒンドークシュをまたぐ、イスラーム勢力と非イスラーム勢力の興亡のありようを解明し、さらにその成果に立脚して、十世紀半ばにアフガニスタン東部、ガズナのまちを征服したAlpteginの行動がいかなる形でフロンティアと関わるのか、Alpteginの後、同地に成立したガズナ朝がどのようにして支配領域を拡大したのかを論じる。第四章「ガズナ朝、セルジューク朝、ゴール朝とインドへの道」では、1040年以降のガズナ朝とセルジューク朝の支配領域がどのようにして接し、それは防御的に意味を持ったのか否か、および、アフガニスタン中央部の山岳地帯から登場したゴール朝の発展のダイナミズムを論じ、さらにガズナ朝や、ゴール朝など北インドへ進出した勢力がどのような道を辿ったのかを解明し、アフガン高地とインダス中・下流域の間の地理的障壁とその通行可能性を考察する。特にガズナ朝の成立期以降、しばらくの間、この地域は軍事化した集団が、それまでのように周縁的でephemeralな存在で終わらず、強大な政治勢力を維持し、このフロンティア地域に巨大な権力中心が生じたことが指摘される。

第三部は「フロンティアと都市」と題して、ヒンドークシュ山脈の南側、現在のアフガニスタン東部における政治権力のあり方と権力中心の遷移が、この地域の「フロンティア性」といかに関連していたかを論じる。第五章「東部アフガニスタンにおける大都市の変遷」ではカーピシー、カーブル、ガズニをとりあげ、それぞれが歴史のどの段階でどのように発展したのかを辿り、この地域の地勢的特徴と関連付ける。重要なのはこの地域に成立する社会の経済基盤がいかなるものであったのかについて

の考察であり、限定的な農業生産力のゆえに、商業交易の利が大きな意味を持ち、結果として政治軍事的情勢の変化が劇的な地域中心の変化を産み出したという特徴を指摘する。

第四部は「フロンティアの文化と社会」と題し、フロンティアにおいて生じた文化融合、文化接触、文化衝突の事例を探る。第六章「バーミヤーン大仏のイスラーム史」は、残念ながら2001年に爆破されてしまったバーミヤーンの二体の大仏とその周囲の仏教遺跡が、イスラーム時代の文献資料の中においてどのように描写されてきたか、そしてそれが時代を経るにしたがってどのように変化したのかを考察する。第七章「フロンティアと文化的差異化ーヘラートのカーマ・ストラ」では文献資料の記述を手がかりに、フロンティアにおける文化の越境に絡めて、イスラーム社会内部、イスラーム法内部、イスラーム文化内部の越境的事象がどのようにして起こったのかを論じることを通じ、フロンティアであるからこそ生じる、トランス・フロンティアな現象の性格と権力性を浮き彫りにする。

第五部は「フロンティアを超えて」と題し、南アジア、西アジア、中央アジア、東アジアといった境界を越えて活動した人々が残した記録から、フロンティアの持つポテンシャルを描き出すことを試みる。第八章「悟空（車奉朝）の入竺」は、751年に唐から罽賓への使節団の一員としてガンダーラに赴き、そのままインドに留まって受戒した悟空の行伝に見える、使節団の経路を分析し、751～53年という時期にムスリムの支配領域と吐蕃支配領域のフロンティア（それはそのまま中国と吐蕃、中国とムスリム世界のフロンティアともなる）がどのように構成されていたのかを考える。第九章「安史の乱時に入唐したアラブ兵について」は、750年代後半以降、安史の乱に揺れる唐の軍隊に参加し、ウイグル兵とともに活躍したとされる「大食」の事例をとりあげ、彼らがどのような者たちであり得たのかを、イスラーム世界側の事情を分析しながら考察し、物理的にフロンティアを超える人や物の動きがどのようなインパクトを他の世界にもたらしたのかを示す。第十章「ヒンドークシュと二つのフロンティア」は、これまでの議論を承け、ヒンドークシュ山脈が歴史的にどのように南北を結んできたのか、逆にどのような場合に障壁として意識されたのかを、特に驚異譚文学の事例の分析から考察し、結果として Di Cosmoの指摘する二種のフロンティアに類似するものが、前近代のアフガニスタン、特にヒンドークシュ山脈周辺において確

認できることを証する。

最後に本論の各章における議論を、フロンティアの特性という角度から再度まとめなおし、あわせて今後ありうべきフロンティア研究の視角や手法についての展望を述べて論文を終える。

(論文審査の結果の要旨)

アフガニスタンは西アジア・南アジア・中央アジアの文化が相互に接触・交錯・混濁する場所であり、その長い歴史を通じて世界史の大きな流れとも重要なかかわりを保持し続けてきた地域である。現代においても2001年の同時多発テロ事件を契機とした多国籍軍の軍事介入など世界的な広がりを持つ諸事象に登場するが、この地域の歴史においては未解明の部分が少なくない。本論文の著者、稲葉穰氏は1982年以来一貫してこの地域の歴史を研究しており、世界的に最高水準の研究者である。本論文はこれまでの研究を、フロンティアとしてのアフガニスタン地域の政治史、交通史、文化交流史という観点から全5部、10章にまとめたものであり、フロンティアという地理的、歴史的、文化的、社会的な概念を基軸とした研究の集大成となっている。

個別の論文内容を詳しく紹介する余裕はないが、これまでに国内外で蓄積された先行研究の成果を十分に吟味・消化した上でフロンティアとしてのアフガニスタン地域に展開された歴史が6世紀から13世紀までを中心として実証的に説明されていく。著者が参照・引用する先行研究は狭義の歴史学の分野にとどまらず、歴史地理・考古・言語・文献・貨幣学の各分野に及んでおり、それらについての深い慎重な理解と長い綿密な考察を経ながら展開される各章、各節における論旨と結論は明解である。具体例を挙げれば、本論文の「第一部フロンティアの政治集団」を構成する「第一章ポスト・グプタ期の政治集団」と「第二章カーブルシャーの時代」においては桑山正進、吉田豊、N.Sims-Williamsなどの世界的に最高水準と評価される先行研究の成果が随所に引用され、イスラーム化以降の歴史においてはこの地域の研究の最高権威であるC.E.Bosworthによる通説や見解が時には実証的に批判されている。著者が参照し、十分に検討、精査した上記各分野についての個別論文や著書からなる先行研究は膨大な数に上り、論文中に多数引用される諸史料が書かれた言語がアラビア語、ペルシア語を中心に漢語、部分的にはバクトリア語、ティベット語、ギリシア語、パフラヴィー語（これらは翻訳）等にも及んでいることはフロンティアとしてのアフガニスタン特有の歴史をそのまま反映している。本論文全体に盛り込まれた上記各分野に属する情報量も莫大であり、前近代のアフガニスタンに関する多言語からなる記述史料が信頼に足る最良の原典から網羅的に集められ、フロンティア研究の観点から学術的に吟味、検討されたのは空前のことである。

著者の卓越した語学力、豊富な実績に裏付けられた文献研究の成果は本論文の全編を通じて見られるが、特に圧巻ともいえる実例は「第二部フロンティアの帝国」において顕著である。この部分は論文全体の3分の1の分量を占め、イスラーム時代のアフガニスタン史がサッファール朝、サーマーン朝、ガズナ朝、ゴール朝といった王朝の興亡だけではなく、これらの王朝が西アジア、南アジア、中央アジア地域とどのような関係を持ち、フロンティアにおけるイスラーム化の進展に如何なる形で関わったかという問題が見事に解明されている。とりわけ文献、考古学調査、貨幣学における信頼性の高い既存の研究成果を通時的、かつ分野横断的に利用することで特にアフガ

ニスタン中央部に位置するヒンドークシュ山脈及び現在のパキスタンとアフガニスタン間にある山地帯越えのルートが時代によってどのように変遷したかを歴史地理学的に解明したという点において、著者の研究成果は過去のいかなる研究をも凌駕している。アフガニスタンでの現地調査経験がない著者の研究成果がこれまでの最高水準に到達しているという判断は誇張と思われるかもしれないが、著者の入念にして真摯な研究姿勢と優れた能力に基づくことが明瞭であるがゆえに、十分に首肯できる。

「第三部フロンティアと都市」ではアフガニスタンの現首都カーブルとガズナ（ガズニ）の歴史地理が通時的に考察され、「第四部フロンティアの文化と社会」では「第六章バーミヤーン大仏のイスラーム史」、第七章でヘラートの「カーマ・ストラ」とも称されるペルシア文学中のポルノグラフィ―*Alfiya wa Shalfiya*（「男根と女陰」）の図像表現にまつわるガズナ朝時代のエピソードが該博で網羅的な文献記述に基づいてイスラーム社会史や美術史の文脈で検討されている。続く「第五部フロンティアを超えて」は「第八章悟空（車奉朝）の入竺について」、「第九章安史の乱時に入唐したアラブ兵について」、「第十章ヒンドークシュと二つのフロンティア」という3章からなり、結論的にかつては自然障壁として西アジア、中央アジアと南アジアを隔てていたヒンドークシュ山脈がガズナ朝時代以来のイスラーム化進展に伴ってフロンティアとしての性格を失っていったにもかかわらず、12世紀以降もムスリム社会で愛好された「驚異譚文学」の中でムスリムにとって不思議と驚異の国であるインドへの関門として心理的なフロンティアであり続けたことを実証している。

全5部、全10章を通じて著者の実証的な研究姿勢は一貫しており、多くの地図、入念に準備された図表、膨大な情報量を含んだ参考文献を備えている上に、史料引用における凝縮され、精巧な表現力は絶賛に値し、完成度が高い。本論文の著者は以前より、ポスト・クシャーン期のアフガニスタン出土貨幣について先駆的な研究を発表したウィーンの貨幣学者R.Göblの後継者たちやアフガニスタンで多くの発掘を手掛けてきた考古学者M.Taddeiとその後継者たちと緊密な信頼関係を築いてきている。彼らの研究成果を縦横に消化・利用しながら、国内外で着実に蓄積された東洋学の実証的な成果を博搜し、さらに著者自身の傑出した語学力に基づくペルシア語、アラビア語文献の正確な読解と分析が本論文の内容を極めて高度なものとしているのである。

著者が満を持して提出した、長年の研鑽に基づく、優れた内容を持ち、独創性と完成度の高い重層的、多元的なフロンティアとしてのアフガニスタン史研究の集大成が早期に公刊され、世界的に学界の共有財産となることを待望して止まない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2020年2月18日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。